

第 33 回

# 南方熊楠賞

記者会見資料

田辺市・南方熊楠顕彰会

〔目 次〕

南方熊楠賞について -----	1
南方熊楠賞運営協議会名簿 -----	2
南方熊楠賞選考委員会委員名簿 -----	2
第 33 回南方熊楠賞（自然科学の部）選考報告 -----	3
//                    受賞者略歴 -----	5
//                    受賞者コメント -----	6
トロフィー制作者略歴 -----	7
授賞式について -----	8
歴代受賞者一覧 -----	9

## 南方熊楠賞について

南方熊楠翁は 1867 年 5 月 18 日（慶応 3 年 4 月 15 日）和歌山市に生まれ、幼時より天才の名をほしいままにし、東京大学予備門（現東京大学）に入学、2 年後退学渡航、米国各地を彷徨、高等植物から菌類・地衣類まで、さまざまな植物を採集、後英国に渡り大英博物館に迎えられ、「ネイチャー」「ノーツ・アンド・クエリーズ」に多くの論考を発表、その学識の深さは古今東西にわたり碩学の名をほしいままにする。

1900（明治 33）年帰国、1904（明治 37）年より田辺に居を定め、雑誌・新聞への投稿、変形菌（粘菌）・菌類を主とした植物の研究に没頭するとともに、エコロギー（エコロジー＝生態学）という言葉を使い、明治政府が推進した神社合祀に反対するなど自然保護に尽力した。

民俗学分野では、日本民俗学の父といわれた柳田国男氏をして「日本人の可能性の極限」と言わしめ、その学殖の豊かさから、様々な質問を受け、回答したものが往復書簡集として発行されている。

植物学分野では、新種の変形菌を多数発見し、自宅の柿の木で発見した新属新種の変形菌（粘菌）は、ミナカタの名を冠せられた。また、高等植物、コケ類、地衣類、藻類、菌類、変形菌類合わせて 3 万点以上の標本を残した。

1929（昭和 4）年、昭和天皇を神島に迎え進講、1941（昭和 16）年永眠した。

---

田辺市と南方熊楠邸保存顕彰会（現：南方熊楠顕彰会）では、翁没後 50 周年記念事業を計画、種々様々な顕彰事業を実施した。

1990（平成 2）年 10 月 20 日、南方熊楠翁没後 50 周年記念式典を開催し、市民の誇りとして翁の偉業を称え「南方熊楠賞」を制定した。

この賞は、国内外を問わず翁の研究対象であった民俗学的分野、博物学的分野の研究に顕著な業績のあった研究者に贈り、また特別賞として翁の研究に顕著な業績のあった研究者に、それぞれ賞状（線崎稲村氏揮毫）及びトロフィー（故 建畠覚造氏制作）並びに副賞（本賞 100 万円、特別賞 50 万円）を贈るものである。

表彰は、例年、年一研究者とし、人文部門、自然科学部門から交互に選考をするものであるが、本年は、自然科学部門よりの受賞者選考となった。

第 33 回南方熊楠賞の受賞者選考については、選考委員会において慎重に審議、選考し、南方熊楠賞運営協議会において受賞者を「塚谷裕一氏」に決定した。

## 南方熊楠賞運営協議会名簿

会 長            真砂 充敏            田辺市長    南方熊楠顕彰会々長

副会長           曾我部 大剛           高山寺住職

監 事            築島 稔            朝日新聞和歌山総局長

監 事            前川 光弘           田辺市教育委員会教育次長

## 南方熊楠賞選考委員会委員名簿

### 【自然科学の部】

選考委員長    鷺谷 いづみ           東京大学名誉教授

選考委員       川井 浩史           神戸大学特命教授

選考委員       石井 実            大阪府立大学名誉教授

選考委員       小林 哲            朝日新聞大阪本社科学みらい部長

## 第 33 回南方熊楠賞受賞者 塚谷 裕一氏 選考報告

第 33 回南方熊楠賞選考委員会  
委員長 鷺谷 いづみ

選考委員会は第 33 回南方熊楠賞の受賞者として、東京大学大学院教授の塚谷裕一氏を選出した。

南方熊楠は、前世紀初頭の英国のナチュラルヒストリー（自然誌）に接し、その後の生涯を通じて、その幅広い知の営みと成果を一般に伝える文筆活動に尽力した。それから 1 世紀ほどの年月を経た現在、ナチュラルヒストリーは、「生物多様性」と人間にとってのその恩恵である「自然の恵み」を持続させる「自然との共生」のための知識・知恵・思想を社会に伝える役割も担っている。

熱帯林でのフィールド研究が盛んになった前世紀半ば以降、生態系の中に網の目のように張り巡らされている生物種間の関係の科学的な理解が広がり、深まりつつある。植物の受粉や種子分散における動物との共生関係は古くから知られていたが、地下で結ばれている植物と菌類との栄養面での強い絆、「栄養共生」の科学的解明が進むようになったのはごく最近のことである。多くの植物が、菌根を発達させて、菌類と栄養共生しており、森林の地下にはそのネットワークが広がっている。その究極のあり方が、光合成をすることなく、菌根を介して完全に栄養を菌類に依存する、従来、腐生植物とも呼ばれてきた「菌従属栄養植物」である。

地球上の生態系の中でも特筆すべき生物多様性を誇ってきた熱帯雨林は、今では人間活動に起因する改変・劣化が著しい。菌従属栄養植物は、希少なだけでなく、小さく目立たないため、人知れず絶滅しているものも少なくないと考えられる。そのような希少な植物を探索して命名する、すなわち科学的に認識することは、「生物多様性の保全と持続可能な利用」という社会的な目標に寄与するナチュラルヒストリーの重要な仕事である。

塚谷氏は、東南アジアに残されている原生的な熱帯雨林を精力的に踏査し、インドネシアボルネオ島のブトゥン・クリフン国立公園でタヌキノショクダイ属の新種、*Thismia betung-kerihunensis* を発見するなど、菌従属栄養植物を含む新種や変種などを見い出して命名することに尽力してきた。東南アジアの熱帯林をはじめとする国内外でのフィールドワークを通じて、1 つの新属、30 の新種を含む 44 の植物の新分類群を命名した。それは、現代の生物多様性ナチュラルヒストリーとして高く評価される業績である。

塚谷氏は、1964 年に神奈川県で生まれ、1988 年に東京大学理学部を卒業、1993 年には東京大学大学院理学系研究科博士課程修了して博士（理学）の学位を取得。岡崎国立共同研究機構・基礎

生物学研究所：統合バイオサイエンスセンター助教授を経て、2005年からは東京大学大学院理学系研究科教授として植物学の研究と教育に従事している。その間、2017年から2021年まで理学系研究科附属植物園（小石川植物園）園長を兼務し、2020年から2022年までは東京大学理学部生物学科学科長を兼務されている。

塚谷氏は、野外研究ですでに述べたような業績をもつだけでなく、最先端の分子レベルの植物学の研究でも、光合成器官である葉の発生、形態形成における遺伝子経路の解明において世界をリードする研究成果を多くあげてきた。

植物の葉は、形や大きさや付き方などがきわめて多様であり、その多様性の理解は植物学の中心的な課題でもある。塚谷氏は、葉の形態がどのような分子遺伝学的しくみによって形づくられるかを理解する上での基本といえる「ルール」のいくつかをモデル植物をつかって明らかにし、葉の多様性を理解する途を切り拓いた。さらに、アスパラガスの仮葉枝、食虫植物サラセニアの袋状の捕虫葉、アヤメやネギなどの葉の裏面の性質しかもたない単面葉、1枚の子葉を無限に成長させその葉だけで一生を過ごすモノフィレア（イワタバコ科）など、通常の葉とは異なる形態をもつ葉が形成される分子的なしくみの解明においても顕著な成果をあげてきた。これらは、分子生物学時代の植物ナチュラルヒストリーの業績として高く評価される。塚谷氏は、葉の形態形成の分子的な仕組みに関する優れた業績が主に評価されて、日本植物学会学術賞、日本植物形態学会賞、紫綬褒章をはじめとする、いくつもの賞を受賞している。

塚谷氏は、研究成果や植物誌を広く一般に普及する執筆活動を精力的に行っている。菌従属栄養植物の新種発見のエピソードを含むフィールドワークの成果を記した「森を食べる植物：腐生植物の知られざる世界」（岩波書店 2016）など、多くの植物誌の著作がある。熊楠は、植物と人間の共生関係の象徴ともいえる果物に強い関心を寄せたが、塚谷氏の著書の中には、「カラー版 ドリアン—果物の王」（中公新書 2006）など、果物を題材としたものもある。これら活発な執筆活動には、熊楠翁に通ずるものがある。

選考委員会は、熱帯林におけるフィールドワークや分子レベルの先端的研究、執筆活動によって、現代の植物学と生物多様性の科学に比類なき貢献をなしつつある塚谷氏を、第33回南方熊楠賞にもっともふさわしい研究者であると評価し、受賞者として選考した。



## 第 33 回南方熊楠賞受賞コメント

塚谷 裕一

このたびは誠にありがとうございます。南方熊楠の名を知ったのは高校生の頃でした。分野に縛られることなく、知的好奇心の赴くまま英国の知の集積の中を存分に探索し、新アイデアを得ては次々と論文に発表した熊楠、そして故郷に帰っては民俗学的追求を深め、あるいは新種の生物を次々と見つけた熊楠の活動に、深く憧れました。今回光栄にも名高き南方熊楠賞をいただくことになり、改めて振り返って見るに、熊楠とは流儀こそ異なれ、その頃の憧れに沿って活動してきた気がします。特に、文系と理系の乖離への反発、そして「〇〇の〇〇に関する〇〇学」といったごく狭い専門性への反発は、一貫して持ち続けてきました。専門を問われれば広く「植物学」と答えてきましたし、大学院生の頃からは、研究と並行して文筆活動も進めてきました。残念なのは、その間にも教育の場では文理の乖離が進められていることです。熊楠の名を冠した賞を頂いた者としての責務は、これに抗し、後進の若者たちがより広い視点と広い守備範囲を保てるよう支援をしていくことでしょう。今後もそれを意識して活動していく所存です。

## 南方熊楠賞トロフィー制作者

故 建畠覚造（たてはた かくぞう）

### 略 歴

1919（大正 8）年 4.22 ～ 2006（平成 18）年 2.16 彫刻家。東京生まれ。抽象彫刻のパイオニアの一人。

行動美術協会会員。

1941（昭和 16）年東京美術学校彫刻科卒業。第 4 回文展で特選。1950 年行動美術協会に彫刻部を創設、会員となる。1954 年ベネチアの第 1 回国際造型美術家会議に出席し、フランスに滞在。日本国際美術展、現代日本美術展、集団現代彫刻展、宇部現代日本彫刻展、1966 年ロダン美術館の国際現代彫刻展、1967 年アントワープ国際彫刻ビエンナーレ展などに出品、抽象彫刻の展開に重要な役割を果たした。

父、建畠大夢（和歌山県有田郡清水町出身、1880（明治 13）年 2.29 ～ 1942（昭和 17）年 3.22、本名 弥一郎）は著名な彫刻家であり、帝展審査員を務め、東京美術学校教授、官展系の代表的彫刻家として活躍した。

### 賞

- 1941（昭和 16）年 文展特選
- 1941（昭和 16）～ 1942（昭和 17）年 直土会賞
- 1943（昭和 18）年 野間賞
- 1966（昭和 41）年 国立近代美術館賞
- 1967（昭和 42）年 高村光太郎賞
- 1981（昭和 56）年 中原悌二郎賞
- 1982（昭和 57）年 長野市野外彫刻賞（美ヶ原）  
和歌山県文化賞
- 1983（昭和 58）年 ヘンリームーア大賞展特別優秀賞
- 1990（平成 2）年 第 40 回芸術選奨文部大臣賞
- 2015（平成 17）年 文化功労者

### 作 品

和歌山県立近代美術館、箱根彫刻の森美術館、美ヶ原高原美術館、長野市野外彫刻、東京芸術大学資料館、和歌山県国体モニュメント、東京銀行本店モニュメント、和歌山県立近代美術館モニュメント、紀南文化会館モニュメント、さいたま博シンボルタワー、東京証券取引所研修センターモニュメント、長野市制 100 周年記念モニュメント、東京芸術劇場モニュメント、東京都新庁舎議会棟ロビー彫刻、東京都中央海浜公園モニュメント、和歌山市制 100 周年記念モニュメント

## 第 33 回南方熊楠賞授賞式

日 程 令和 5 年 5 月 6 日 (土) 午後 1 時 30 分より

会 場 紀南文化会館 小ホール

定 員 200 名 (先着順)

1. 授賞式

2. 記念講演

演 題 『植物学とエッセイと…興の赴くまま』

講 師 第 33 回南方熊楠賞受賞者 塚谷 裕一 氏

※新型コロナウイルス感染拡大防止のため、今後の状況によっては予定を変更する可能性があります。

○お申し込み お電話または下記の専用申込フォームより受付します。



<https://logoform.jp/f/Lch6c>

○お問合せ 南方熊楠顕彰会事務局

〒 646-0035

和歌山県田辺市中屋敷町 36 番地 南方熊楠顕彰館内

Tel : 0739-26-9909 Fax : 0739-26-9913

E-mail minakata@mb.aikis.or.jp

## 歴代南方熊楠賞受賞者一覧

### 第1回南方熊楠賞（人文の部）

バーバラ・ルーシュ 氏

日本中世の主要な問題点を再検討し、日本文化を創造した人々の活動を実証的に新たな視角から解明した。

### 第1回南方熊楠賞（自然科学の部）

神谷 宣郎 氏

戦前、日本では細胞を生きたまま扱うことがほとんどできなかった時代に、粘菌を活用し、極めて独創的な方法で原形質流動の分子機構を明らかにした。

### 第2回南方熊楠賞（人文の部）

谷川 健一 氏

長年在野にあつて研究を継続、民衆文化へ目を向け、柳田国男、折口信夫などの民俗学の成果と課題を多角的、総合的に研究。熊楠翁の視点にも論究した。民衆文化への視点を持ちながら、沖縄文化との比較研究をおこなった。

### 第3回南方熊楠賞（自然科学の部）

椿 啓介 氏

真菌類の研究で知られ、特に不完全菌類の研究に深く、その雑多な形質の中で分生子(胞子)形成様式という新分類基準を選び出し、分類体系を確立した。

### 第4回南方熊楠賞（人文の部）

國分 直一 氏

東アジアの民族文化の比較研究に取り組み、台湾などの各地の発掘調査で、多くの研究成果をあげた。

### 第5回南方熊楠賞（自然科学の部）

吉良 龍夫 氏

森林の生態系について観測と実験、数理的解析を加えて研究。科学的根拠を通して自然保護の大切さを訴えた。

### 第5回南方熊楠賞（人文の部）

鶴見 和子 氏

熊楠の博物学研究が地球規模で行われていたことに気づき、「地球志向の比較学」と題した論文を発表するなど、熊楠研究の新しい分野を切り拓いた。

### 第6回南方熊楠賞（自然科学の部）

竹内 郁夫 氏

細胞性粘菌を用いた発生生物学研究の第一人者。肉眼では見えず、生活サイクルなどが未解明の細胞性粘菌を日本で初めて研究材料として取り上げて研究の基礎を確立、発生生物学研究に多大な功績を残した。

#### 第7回南方熊楠賞（人文の部）

川添 登 氏

建築評論家として活動する一方、在野の研究者として都市民を対象にした新しい民俗学の分野として「生活学」を提唱、体系化した。

#### 第8回南方熊楠賞（自然科学の部）

四手井 綱英 氏

森林植生分布や里山林の起源、森林での水と養分の循環や動物の役割など、創意に富んだ研究を発表し、すぐれた研究者を育てた。

#### 第9回南方熊楠賞（人文の部）

加藤 九祚 氏

シベリアや中央アジアなどのユーラシア内陸部全域にわたるフィールドワークをおこない、シベリアの民族に関する記録を古今東西の資料とつきあわせることによって、歴史民族学の新しい分野を開拓した。

#### 第10回南方熊楠賞（人文の部）

上田 正昭 氏

アジア、特に東アジアを視野に入れたスケールの大きな日本古代史の研究家。

文献史学をベースとしながら、国文学、考古学、民俗学などの研究成果も取り入れ、古代社会を多面的に研究し、とくにヤマト王権成立から律令体制成立期の権力構造の分析や宗教と信仰などを主とする。またその他、その鋭い人権感覚から在日朝鮮・韓国人や被差別部落の問題にも積極的にかかわり、その問題意識から、従来の学統を総合する独自の方法で研究を大成されている。

#### 第10回南方熊楠賞（自然科学の部）

日高 敏隆 氏

日本動物行動学のパイオニア。動物行動の生理学的・行動学的・社会学的基礎を確立した意義と貢献はきわめて大きいとの世界的評価を得ている。

#### 第11回南方熊楠賞（自然科学の部）

青木 淳一 氏

土壌中にすむダニの仲間の研究に半生を捧げ、日本に知られるササラダニの約半数を新種として記載。また、ダニの研究を通して環境評価や環境診断の基準の確立、日本土壌動物学の確立に大きく貢献し、各界からきわめて高い評価を受けている。

#### 第12回南方熊楠賞（人文の部）

櫻井 徳太郎 氏

青年期に柳田国男氏に師事し、その後民俗学諸分野にわたる幅広い研究を手がける。

殊に民俗宗教の分野では、民俗宗教の社会基盤を追究しての論究は学問的論争を起し、日本の学会でのシャーマニズム研究展開の軸となる業績が高く評価を得ている。

受賞に際し、「日本民俗文化の特質を抽出するには、少なくとも周辺民族との比較が必要で、南方学の成果を貪り吸収した」とのコメントを寄せられた。

### 第 13 回南方熊楠賞（自然科学の部）

本郷 次雄 氏

1945（昭和 20）年当時、正確な同定が困難であったハラタケ目のキノコの種の特徴を正確に把握し、以来、今日まで 200 種を越える新種を記載するとともに、それを上回る数の日本新記録の新産種を報告しつづけてきた。また、その研究成果は「原色日本菌類図鑑」などで紹介され、これらの著作が日本産キノコ類の紹介に果たした功績は限りなく大きい。

### 第 14 回南方熊楠賞（人文の部）

佐々木 高明 氏

東南アジアや東アジアなどの諸国の現地調査を通し、日本人とそのアイデンティティの基礎にある日本文化の形成過程を、「稲作文化」をはじめ「照葉樹林文化」や「ナラ林文化」などの大きな文化類型を設定することにより、さまざまな形で跡づけられた。また、国立民族学博物館の創設に尽力され、その後も同館館長として民族学資料の収集と研究成果を、国内はもとより広く世界に発信し、日本における民族学研究の指導的役割を果たされた。

### 第 15 回南方熊楠賞（自然科学の部）

柴岡 弘郎 氏

植物生理学、細胞生物学が専門。高校生の時の「向日葵は本当に廻るのか」という素朴な疑問がきっかけで植物学の世界に進まれ、「植物はどのようにして生長するのか」という最も基本的な現象のメカニズムを研究され、生理活性物質と植物ホルモンの相互作用により制御されることを解明された。常に時代を先取りする世界的な研究業績によって植物の生長生理学分野を牽引されてこられた。

### 第 16 回南方熊楠賞（人文の部）

岩田 慶治 氏

1957 年以来四半世紀にわたり東南アジアの稲作民族を調査、日本との比較民族学研究を行い、アニミズムの再考を提唱された文化人類学者、人文地理学者。積年のアニミズム研究から、人間にとって必要な根源的な宗教感覚ないしは宗教性を、現代に甦らせた独創的思想家で、岩田学なる独自の学問体系を確立された。

### 第 17 回南方熊楠賞（自然科学の部）

伊藤 嘉昭 氏

生態学や社会生物学が始動しはじめた時代に、それらの学問をいち早く取り入れ、先駆的な業績を公表し、それを一般に広く紹介した。特に、沖縄のウリミバエ対策事業にかかわり、不妊化オスの放飼による防除計画を策定、実行し、沖縄でのウリミバエの根絶に成功された業績は、生態学が社会に貢献した例として世界的にも高い評価を受けている。また、生態学者の視点と純粋な正義感から、米軍によるベトナムでの枯葉剤使用に対する反対声明や沖縄やんばるの森の自然保護活動など、常に自然保護運動に尽くされた。

#### 第 18 回南方熊楠賞（人文の部）

伊藤 幹治 氏

丹念なフィールドワークと膨大な文献による理論研究により、日本という国の民俗文化を集中的に研究する民俗学（フォクローア）と世界の諸民族の社会や文化の比較研究を行う民族学（エスノロジー）という二つのミンゾク学の統合の中から新しい日本人・日本文化論の構築された。

それは二つのミンゾク学の交流の原点に位置し、実地調査と文献研究によりその研究を展開させてきた南方熊楠の学問研究の特質と軌を一にするものと、高く評価された。

#### 第 19 回南方熊楠賞（自然科学の部）

堀田 満 氏

草創期の植物分類学の気概と伝統を継承し続けている最後の植物学者の一人。

氏の植物分類学の研究はサトイモ科から始まり、数々の分類を手がけられるとともに植物の分布形成過程を究明した植物地理学上の功績は高く評価されている。人とイモの関係に関する民族植物学の視点からの論考は、照葉樹林文化論にも大きな影響を与えた。

また、採集された植物標本は約 7 万点に及び、これらの標本を背景にした植物の多様性に関する圧倒的な知識に基づき、現在もなお、植物をこよなく愛し、植物を求めて各地を精力的に歩きまわり、その保護に心血を注ぐ姿は、南方熊楠翁の足跡を偲ばせる。

#### 第 20 回南方熊楠賞（人文の部）

山折 哲雄 氏

インドをはじめ、アジアや欧米の宗教思想史の研究を背景にして、日本の民俗文化や日本人の心の問題を広く深く考察し、その考究の深みの中から、日本人の心の問題の未来を見据えた上で、大きなスケールで情報を発信しようとしている。その研究は、欧米の思想を十分に咀嚼し、きわめて広い視野から、日本の民俗文化について考察を加え、日本人のもつ神々の問題や世界観の問題の解明に、旺盛な研究意欲をもって迫ろうとした南方熊楠の研究と通底するところが少なくない。

#### 第 21 回南方熊楠賞（自然科学の部）

河野 昭一 氏

植物生態学、植物系統分類学の研究・教育に専念する傍ら、自ら「種生物学研究会」（のちに「種生物学会」に改称）を立ち上げ、数多くの研究者を育て上げるとともに、機関紙「種生物学研究」「Plant Species Biology」を刊行し、数多くの論文を発刊した。京都大学退官後は、日本生態学会自然保護専門委員会委員、NPO 法人地球環境大学理事長などとして、日本の自然、特に中池見湿原の保護、各地の国有林における不法伐採の摘発と保護等に大活躍している。その様子は神社合祀に反対し、活動した南方熊楠翁を髣髴とさせるものである。

## 第22回南方熊楠賞（人文の部）

森 浩一 氏

多くの著名な考古学者、歴史学者とも、若いころから交流を持ち、いろいろとアドバイスは受けてきたが、誰かを師と仰ぐことはせず、「森古代学」の探究を続けてきた。また、「考古学は地域に元気を与える学問でなければならない」と主張、研究成果を社会に還元するために労力を惜しむべきではないと、メディアへの対応をいとわないなど、調査研究の優れた業績だけではなく、執筆、講演、シンポジウムの企画立案など多彩な啓蒙活動や遺跡保存への働きかけは熊楠翁の生きざまに通じるものがある。

## 第23回南方熊楠賞（自然科学の部）

杉山 純多 氏

フィールドから分子にまで及ぶ幅広い研究を続け、菌類の多様な形態に着目するとともに、環境に応じて変幻自在に変化する菌類について、分子的解析手段を導入してその実体を明らかにし、菌類という生物の生き方の謎の解明に大きな前進をもたらした。このことは、熊楠翁の抱いていた菌類（変形菌類）の謎の解明につながるものである。

## 第24回南方熊楠賞（人文の部）

石毛 直道 氏

食文化研究のパイオニアで、これまで学術的な研究対象となりにくかった「料理」を、それを創作し伝えている人たちの歴史、習俗、暮らし、自然環境などを網羅した生活体系の一つの「食文化」として捉え、人類史的な視野での比較文明論の主要素であることを提示した。未知の食文化を求めて世界各地を訪れ、豊富なデータを集め続けた学問への姿勢は、身近に生息する粘菌を探し求め、世界的学者になった熊楠翁に通じるものがある。

## 第25回南方熊楠賞（自然科学の部）

井上 勲 氏

学生時代から一貫して、微細藻類の系統分類学的研究を行い、また「藻類画像データ」をインターネット上に公開して、多様な藻類の世界についての新しい知識を学界・社会に普及させるなど、学術的意義ばかりでなく、啓蒙的な価値の高い研究も行っている。細胞生物学から分類学に及ぶ幅広い研究により、現代的な博物学ともいえる藻類学の分野を推進した業績は顕著であり、南方熊楠翁の博物学を髣髴とさせるものである。

## 第26回南方熊楠賞（人文の部）

中沢 新一 氏

宗教学を足掛かりとして、人類学や民俗学のフィールドにも歩みを進め、現在は対称性人類学と呼称される領域を提示しており、従来の学問の枠組みにとらわれない研究成果を実現している。特に、独自のアート感覚あふれるフィールドワークの手法を用いる「アースダイバー」は、注目すべき取り組みである。思想アートとでも評すべきこの取り組みは、現代人にとって新しい知見と感性を切り開く可能性をもっていると思われる。中沢氏の独創性とトリックスター的な役割は、人文学のみならず、多くの分野に影響を与えた。

### 第 27 回南方熊楠賞（自然科学の部）

加藤 真 氏

学生時代から一貫して、昆虫と植物など多様な生物が複雑に絡み合う共生関係を解き明かし、生態学研究を大きく発展させている。さらに、森林、干潟、湿地など様々な生態系が、多様な共生関係で成り立っていることをつまびらかにすることで、生物多様性、生態系の保全にも貢献。また、植物と昆虫の共生関係だけでなく、森林、湿地、河川、干潟、藻場など様々な生態系で、多様な生物の種間関係を調べ、学術的な意義だけでなく、保全にも役立つ情報発信を続けてきた。

### 第 28 回南方熊楠賞（人文の部）

櫻井 治男 氏

神社合祀問題について、三重県下を主なフィールドワークの対象として「行政村」単位での合祀の事情を具体的に明らかにするとともに、従前ほとんど注目されていなかった、合祀後の地域社会の様相や祭礼行事の持続と変容の内容を解明することに独自の視点を据えて、その結論を導き出している。

### 第 29 回南方熊楠賞（自然科学の部）

馬渡 駿介 氏

一貫して無脊椎動物の種分類学に関する研究に邁進し、特に苔虫動物門に属し淡水から海水に生息する、コケムシと呼ばれる群体性の固着生物の研究に注力。多くの新種を含む日本産コケムシ類の種類相を明らかにした。また、世界中のコケムシ標本との比較研究も行い、いくつかの科・属・種についての分類体系に改訂を加えた。広範な無脊椎動物についてフィールドにおける丹念な調査・研究に基づき種を記載・分類するという姿勢は、熊楠翁の精神に通じるものがある。

### 第 30 回南方熊楠賞（人文の部）

北原 糸子 氏

災害社会史という知の新たな領域の開拓者であり、災害時における人間行動の研究や情報メディアの社会史的な分析は先駆的な研究として評価されている。また、災害史を歴史学だけの専有物とすることなく、理工学分野の研究者との協同において切り拓いてゆこうとする姿勢が、災害研究分野における「文理融合」の起点の一つになったといえる。東日本大震災後に何度も被災地に足を運び、調査を行う北原氏の姿には、在野の研究者であり、フィールドの人であった南方熊楠を思い起こさずにはいられない。

### 第 31 回南方熊楠賞（自然科学の部）

山極 寿一 氏

大学院在学中にニホンザルの形態特性の変異を調べることから人類学、特に霊長類学研究を開始した山極氏は、その後、研究の場をアフリカに移し、時にはゴリラ語を駆使しながらゴリラの群れに接触した結果、ゴリラの多様な行動様式や社会関係を明らかにした。また、研究活動のみではなく、ゴリラと人間との共存を目的とした基金の設立、ゴリラを中心としたエコツーリズムの可能性についての模索など、その活動は多岐にわたっている。徹底したフィールドワークを行い、自然のサルやゴリラの群れの懐に飛び込むことにより、多くの新知見を得、さらにはゴリラの保全活動等にも取り組む姿勢は、熊楠翁の精神を彷彿させるものである。

## 第 32 回南方熊楠賞（人文の部）

江原 絢子 氏

調理という作り手の視点から日本の食文化を深く探求することにより、日本における食物史を開拓し、「和食文化」を学術領域として確立することに大きく貢献した。さらに、功績として特筆すべきは、学会活動を先導し、地方、女性、次世代の研究者養成に大きく寄与している点である。人びとの暮らしのまわりに広がる文化に対して文献渉猟と現地観察を徹底するというスタイルをとっており、その点で南方熊楠の精神に大いに通じていると言える。

---

## 南方熊楠特別賞 第 1 回時

長谷川 興蔵 氏

「南方熊楠選集」・「南方熊楠日記」の編集と校訂に尽力し、南方熊楠研究の発展に大きく寄与。

## 南方熊楠特別賞 第 1 回時

小林 義雄 氏

南方熊楠翁の菌類彩色図や標本を検討し、「南方熊楠菌誌」と「南方熊楠菌類彩色図譜百選」の刊行に貢献。

## 南方熊楠特別賞 第 7 回時

カルメン・ブラッカー 氏

英国民俗学会長の就任講演で南方熊楠の研究を紹介するなど、南方学の研究と海外での紹介に大きく貢献。

## 南方熊楠功労賞 第 11 回時

樋口 源一郎 氏

日本における科学映画の第一人者で、国内外の科学映画祭において数々の賞を受賞。90 歳をゆうに越えた今日でも、映画製作の第一線で活躍され、特にこの 20 年間ほどは、粘菌やキノコの生態、生活史の映像化に力を入れられている。

## 南方熊楠特別賞 第 12 回時

神坂 次郎 氏

自ら現地に足を運び調査研究された資料に基づき、熊楠翁の人物像を見事に浮き彫りにし、仕上げた数々の熊楠翁をテーマにした伝記小説を通じ「知の巨人・南方熊楠」の名を日本全国に知らしめた業績が高く評価される。

特に、その執筆活動及び卓越した作品の中でも、「縛られた巨人 南方熊楠の生涯（S62）」は熊楠ブームの火付け役となる等、熊楠翁顕彰に果たした役割は大きい。

## 南方熊楠特別賞 第 13 回時

後藤 伸 氏

文系の視点による翁の業績への研究が多数を占めていたなか、自然科学者の視点からその研究に取り組み、自らのフィールドワークを通じて、翁が行った神島を始めとする南紀の植物生態研究を再評価し、また翁が収集した標本類の整理・研究にも多大な貢献

南方熊楠特別賞 第23回時

中瀬 喜陽 氏

今日のように進んだ熊楠研究の基礎をつくったパイオニアの一人であり、長年地元を対象にした地域文化の研究に力を傾注してきた。翁が残した書簡や日記等の膨大な資料を根気強く解読し、また翁を知る人への聞き取りを通して、熊楠研究に次々と新資料を加えた。氏はその成果を単に著作としてまとめるだけでなく、市民や研究者を対象に熊楠自筆資料の解読講座を開き、後進の指導にも取り組んできた。さらに、研究者としての活動だけでなく、翁の顕彰事業推進にも大きな役割を果たした。

南方熊楠特別賞 第25回時

萩原 博光 氏

熊楠翁の収集した変形菌類（粘菌類）やきのこ類の多数の標本の整理やその難解な記載資料等の解読・公表に尽力するとともに、その業績を広く社会に発信し、翁の卓越した科学者としての側面を世に知らしめた。



## 【第 33 回南方熊楠賞受賞者】

つかや ひろかず  
塚谷 裕一 氏

東京大学大学院教授

専攻：植物学

神奈川県鎌倉市在住



### ●選考理由（抜粋）

東南アジアの熱帯林をはじめとする国内外でのフィールドワークを通じて、菌根を介して完全に栄養を菌類に依存する「菌従属栄養植物」など、1つの新属、30の新種を含む44の植物の新分類群を命名したほか、最先端の分子レベルの植物学の研究においても、葉の形態がどのような分子遺伝学的仕組みによって形づくられるかを理解する上での基本といえる「ルール」のいくつかをモデル植物をつかって明らかにし、葉の形態形成における遺伝子経路の解明において世界をリードする研究成果を多くあげてきた。これらの成果は現代のナチュラルヒストリーとして高く評価される業績であり、またその研究成果や植物誌を広く一般に普及する精力的な執筆活動は、熊楠翁に通ずるものがある。

●生年月日 1964（昭和39）年10月18日（58歳）

### ●略 歴

1964年：神奈川県生まれ

1988年：東京大学理学部生物学科植物学教室卒業

1990年：同大学大学院理学系研究科 植物学専攻修士課程修了、理学修士

1993年：同大学大学院理学系研究科 植物学専攻博士課程修了、博士（理学）

1993年：日本学術振興会 PD 特別研究員

1993年～1999年：東京大学分子細胞生物学研究所・助手

1998年～2001年：科学技術振興事業団「さきがけ研究21」研究員（併任）

1999年～2005年：岡崎国立共同研究機構・基礎生物学研究所・助教授

（現：大学共同利用機関法人 自然科学研究機構 基礎生物学研究所）

2001年～2005年：総合研究大学院大学・先導科学研究科・助教授（併任）

2004年～2005年：総合研究大学院大学・生命科学研究科・助教授（併任）

2004年～2005年：京都大学大学院理学系研究科・客員助教授（併任）

2005年～現在：東京大学大学院理学系研究科・教授